

GID（性同一性障害）学会第22回研究大会報告

The 22nd Annual Meeting of the Japanese Society of Gender Identity Disorder

会長 難波祐三郎（岡山大学病院 ジェンダーセンター）

Yuzaburo Namba (Gender Center, Okayama University Hospital)

この度、GID（性同一性障害）学会第21回研究大会が2019年3月23日（土）、24日（日）の2日間にわたり、岡山県医師会館で開催されました。大会長は、岡山大学病院ジェンダーセンター・センター長で形成外科医の難波祐三郎教授です。GID学会は1998年に発足した性同一性障害／性別違和に関する研究の推進、知識の向上を目的とした学際的な学会であり、研究者だけでなく当事者や家族も参加しています。ご存じのように岡山大学病院では1999年に、精神科神経科、婦人科、泌尿器科、形成外科の4科合同でチーム医療を行う「岡山大学ジェンダークリニック」を設置し、2001年1月には全国2例目の「公式の」性別適合手術を行いました。その後、病院の中央診療部門として性別適合手術を専門に行う「岡山大学病院ジェンダーセンター」も設立され、これまでに2,400名を超える患者を受け入れてきました。GID学会の研究大会はこれまでも、2002年岡山大学精神神経病態学教室の黒田重利教授（現名誉教授）が第4回、2012年には岡山大学保健学研究科の中塚幹也教授が第14回を主催しています。最近ではセクシュアルマイノリティーの権利擁護を求める政治的、社会的な動きがしばしば報道されるようになり、2018年4月には関係者の悲願でもあった性別適合手術への保険適用が認められるなど、この領域には医療を含む広い分野から関心が集まっています。

今回のメインテーマは、「法律、保険、その先へ～The Next Step in the Next Decade～」です。声帯手術の第一人者である韓国・イエソン音声センターのHyung Tae Kim（キム・ヒョンテ）先生による特別講演の他、シンポジウムとして、「メディカルツーリズム」、「ヴォイストレーニング」、「性別違和を持つ子どもへの対処」を、ワークショップとして「ジェンダークリニックの立ち上げ方」を取り上げました。ユニークな企画としては、岡山県が全国一のシェアを占める学校制服業界からカンコー学生服が企業ブースを設けた他、化粧品大手の資生堂がトランス女性向けの「楽

しく知るスキンケア&メイキャップ How to」という特別企画を実施しました。本研究大会では、2日間で招待講演を含む特別講演5演題、特別企画1演題、シンポジウム10演題、ワークショップ5演題、一般口演32演題が行われ、参加人数378名という結果でした。

開催初日、本学会開始に先立って、医師を対象とした「第10回（性別適合手術）手術手技研究会」と専門職に対する認定資格の単位を発行する「第10回 GID 学会エキスパート研修会」が行われました。「手術手技研究会」には、かなりコアな分野にもかかわらず35名の参加者がありました。また、今回初めて有料で行われた「GID 学会エキスパート研修会」には、第20回東京大会での70名を上回る82名の参加者があり、急遽会場のレイアウトを変更する必要に迫られました。エキスパート研修会は、教員、コメディカル、法曹関係者など医師以外の専門職にも門戸を開いており、35名は医師以外の参加者でした。系統だった知識を求めるさまざまな専門職がいることを反映していると思われます。

本学会は、難波祐三郎会長の会長講演で始まりました。岡山大学病院における診療の歴史、手術法の変遷や複数診療科でのチーム医療のスムーズな運用について試行錯誤の経緯が語られ、この流れの先に何をすべきなのかを示唆する講演となりました。続くシンポジウムではメディカルツーリズムの問題を取り上げました。性別適合手術の国内におけるキャパシティーが少ないことを反映してタイなどの海外で手術を受ける当事者が多数おられる現状があり、現場に携わる演者から生々しい報告がありました。引き続き、2日目の招待講演の内容とも関連したヴォイストレーニングのシンポジウムも行われました。男性ホルモンの使用で声は男性化しますが、女性ホルモンを使用しても声の女性化は起こらず、何らかの方法で女性らしい声を獲得したいと望む人が大勢おられます。臨床現場で指導している3名の演者から、高度な身体操作に加えてクライアントの真のQOLの向上は何によって得られるの

かを巡って深い議論が行われました。1日目最後のプログラムとなったワークショップでは、まだまだ不足している国内の医療機関を増やすべく、ジェンダークリニックの立ち上げ方を取り上げています。大学病院、総合病院、地域での具体的な取り組み等が語られる一方、当事者団体の代表からは当事者が医療機関に求めるものについて詳細なアンケート調査の結果が報告されました。シンポジウム、ワークショップなどと同時進行で行われた一般演題は、「学校と子供」「社会学」「当事者団体」を取り上げ、立ち見の出る盛況でした。懇親会も予想を大きく上回る参加者数となり、手狭な会場では食事でもそこそこに情報を求めて参加者の熱心なやりとりが続いていました。

2日目は、vocal fold shortening and retro displacement of anterior commissure (VFSRAC) という新しい声の女声化手術を開発した韓国・イエソン音声センターの Hyung Tae Kim 先生の招待講演で始まりました。韓国国内より海外から同センターを受診する患者数の方が多く、世界中から注目されている手術です。1時間30分の講演のうち、半分以上は日本語通訳を交えたディスカッションに費やされました。臨床医や音声療法に携わる専門家だけでなく、当事者からも質問があり、熱心な議論となりました。これに引き続いて資生堂の企画で、タレント、ラジオパーソナリティ、メイクアップアーティストのトークセッションとメイクアップの実演が特別企画として実施され盛況でした。さすがはプロのプレゼンテーションで、人を引きつける魅力に感心させられるものでした。



Vocal fold shortening and retro displacement of anterior commissure (VFSRAC) を開発した韓国・イエソン音声センターの Hyung Tae Kim 先生の招待講演



2018年の優秀演題賞の発表もありました。東京大学大学院精神看護分野大学院生の江口のぞみさん（左）、特定非営利活動法人ぶれいす東京の大槻知子さん（中）、GID 学会理事長の中塚幹也先生（右）。

GID 学会の理事長でもある岡山大学保健学科・中塚幹也教授の理事長講演「GID 学会の現状と提言」と学会総会を挟んで、最後のシンポジウム「性別違和を持つ子どもにどう対処するか」が開かれました。シンポジストは、教育委員会所属の人権教育担当教員、臨床経験豊富な心理士、ジェンダーと社会制度について研究している社会学者、憲法を専門とする法学者で、医療を離れた幅広い視点から性別違和を持つ子どもに社会や専門家、そして家族に何が出来るのかを問いかける内容となりました。ディスカッションでも多くの質問が出て、時間を超過する熱い議論となりました。

性別違和に留まらずセクシュアリティの問題は、人生や社会のあり方と深く関わっており、医療関係者である我々も知っておくべきことが多いとあらためて感じた2日間でした。本大会が盛況の内に終わることが出来たのも、準備・運営をご支援いただいたキョードープラスと岡山大学形成再建外科学教室の皆様、ご協力いただいた関連病院、共催企業の皆様、そして演題をお寄せいただき議論を戦わせて下さった参加者の皆様のおかげと、深く感謝しております。ここに御礼申し上げます。

（岡山大学病院 ジェンダーセンター 松本洋輔 記）

平成31年4月20日受稿
〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1
電話：086-235-7242 Fax：086-235-7246
E-mail: ymatsumo@okayama-u.ac.jp